

■ 論 文

## 聖ヒルダ・ミッションの慈善事業(2) ——濃尾震災救援と孤児院事業——

中西 良雄

St. Hilda's Mission and Christian Charity(2)

Yoshio NAKANISHI

キーワード：聖ヒルダ・ミッション，キリスト教慈善，聖ヒルダ孤女院，麻布孤児院，濃尾震災

St. Hilda's Mission, Christian Charity, St. Hilda's Orphanage, Azabu Orphanage, Nobi Earthquake

### 一. 日本聖公会関係者の震災救援活動

1891(明治24)年10月28日の濃尾震災発生からおよそ1か月後に発行された日本聖公会のSPG(英国海外福音宣教会)系の雑誌『日曜叢誌』(25号)は、英国国教会の日本宣教主教E・ビカステス(Edward Bickersteth)が創設した聖ヒルダ・ミッション(St. Hilda's Mission, 聖ヒルダ宣教団)<sup>1)</sup>も含めた東京の聖公会関係者による活発な濃尾震災救援の諸活動を列挙して報じている。この記事を手がかりに、以下で述べる聖ヒルダ・ミッションの孤児院が生まれる直前の救援活動の状況——日本聖公会とはいえ、同誌の性格からSPG系にやや偏ってはいるが——を一瞥しておこう。番号を付して整理すればつぎのようである。

(一)「厚生館にて慈善音楽会を催したるは三一教会の有志者」。(二)「聖慈堂病院よりはナース、グレース、小島春庵外に看護婦一名をして被災地に赴き岐阜県下高須辺にて数百名を施療」。(三)「香蘭女学校のソーントン女史も亦[被災地に—— [ ] 内の補注は引用者、以下同じ] 赴き」。(四)「アーチデヤコノ[大執事]、シヨー氏も[被災地を] 巡視して為すところあり」。(五)「カル

クス、シヨー、三宮の三令夫人が発起にて内外の淑女、及びアンデレー教会の三姉妹等と共に新古の綿入、シャツ等を調べて被害地へ送りしは八千余点の多額に上れり」。(六)「鉄道局第二課長及び属官浅野氏其他の親切」。(七)「番町孤児院の本郷氏の奔走」。(八)「其他東京及関東に在る諸教会員は有志救助会と聯合して義捐金を送れり」<sup>2)</sup>。

(一)・(五)・(八)のような慈善音楽会の開催や直接義捐の金品を募集する活動は、当時盛んに行われたが、(一)は1891年11月3日に築地の東京三一神学校生徒らによって木挽町の厚生館で開催された「震災救助音楽会」のことで、この種のチャリティのとくに早い例である。聖三一教会の伝道師・名出保太郎「主会」のもとに開かれたこの会は、平岩愼保らの演説にピアノ合奏などの音楽演奏や落語の上演も交えたプログラムで、90余円の寄付金を集めた<sup>3)</sup>。また義捐金品の寄贈では、(五)にみられるように、芝の聖アンデレー教会婦人会員らが呼びかけて取りまとめ、愛岐両県に多くの衣料が数回にわたって贈られた。その数「八千余点」とあるが、別の記録では「1万点以上」<sup>4)</sup>とされている。いずれにしても一団体からの救援物資としては最大級のものであった。その聖アンデレー教会の創設者であるSPG宣教師A. C. ショー

(Alexander C. Shaw) による(四)の震災地「巡視」の詳細な報告は、英字紙『ジャパン・ウィークリー・メール』(*The Japan Weekly Mail*)に掲載された<sup>5)</sup>。ショーは震災救援に関して当時の日本のキリスト教系紙誌に登場することは少なかったが、この他にも自ら義捐金を募っておよそ600ドルを寄付し、また岐阜の「廢墟」と化した被災地にテント張りの「避難所」(freely-offered shelter)を設けるなど<sup>6)</sup>、その「為すところ」は大であった。

聖ヒルダ・ミッションの医療事業である(二)の聖慈堂病院については前稿<sup>7)</sup>ですでに詳述したが、同病院派遣の救護隊はミッション団員の看護宣教師ナース・グレース(グレース・ハートレー, Grace Hartley), 同病院主医(院長)小島春庵, 同ミッションの指導的メンバーである香蘭女学校(St. Hilda's School)教師E・ソントン(Elizabeth Thornton), その「外に看護婦一名」とされている同病院看護師の桜川リイの4名で構成されていた。「数百名を施療」とする根拠は明らかでないが、ナース・グレースが看護にあたった施療患者数として報告しているのは186人である<sup>8)</sup>。また、(三)のソントンが被災地に赴いたというのはこのことを指している。(六)は、鉄道院の日本聖公会関係者による義捐物資の輸送に関する便宜かと思われるが、詳細については今のところ明らかにし得ない。

(七)の本郷定次郎は震災前の1891年2月に「貧児教育暁星園」を開設していたが、その所在地の麴町区一番町から「番町孤児院」と呼び習わされていた。明治の孤児救済史に欠かせない本郷に関しては、すでにいくつかの評伝的研究が発表されている<sup>9)</sup>。ただ彼の震災救援活動に限っていえば、つねに参照される佐藤一誠『育児暁星園』(1898年)の「園務を挙て夫人の手に托し倉皇旅装を整て震災地に赴き」、「同志の士と共に孤児院事務所を建て且つ一般罹災者の救済に力め経鞋縦横八方に奔走」<sup>10)</sup>という記述の具体的内容が従来明らかでなかったが、ここではそれに関して、つぎの2点を指摘しておきたい。第一に本郷は、キリスト者による濃尾震災救援活動の主要な拠点の一つ、大垣の基督教徒救済事務所に結集して、孤児救済をはじめとする現地救援活動を中心的に担った青年グループ<sup>11)</sup>の一員であったこと。第二に、その活動のなかで震災犠牲者の子ども「数人」を引き取り<sup>12)</sup>、またそのグループの「同志」の活動報告<sup>13)</sup>から、

本郷は震災で「縁者」を失った老婦人「四名」を救済し、東京に連れ帰ったと考えられることである。

最後の(八)にいう「有志救助会」とは、早くも同年11月2日に東京をはじめ関東のプロテスタント諸派の有志が銀座会館に参集し、ただちに結成された基督信徒有志震災救助会のことである。罹災した同胞に対し「基督信者有志の名を以て同情を表せんが為め」<sup>14)</sup>義捐を訴えた同会は、常置委員として平岩愼保・網島佳吉・本多庸一に香蘭女学校校主でもあった今井寿道を含めた4名、会計に貴山幸次郎・小方仙之助の2名を選出、京橋区竹川町の護教社内に「救恤事務所」を設置した<sup>15)</sup>。同会の義捐者名簿に、聖ヒルダ・ミッションの香蘭女学校中学科・小学科生徒有志の4円55銭、同「伝道部」生徒有志の1円15銭、聖慈堂病院看護師3名の50銭<sup>16)</sup>も見出すことができる。

ここに、広く知られている石井(当時大須賀)亮一の孤女学院の創設(1891年12月30日)や、同じく石井も開設に尽力し、運営にあたった築地の東京教育院による震災孤児の受入れ(1891年11月25日)<sup>17)</sup>などが取り上げられていないのは、もちろんこの記事の執筆時期によるものである。当時のキリスト者による震災救援活動の主要な分野は、義捐金品のキャンペーン、医療救護、孤児救済、救援活動のネットワーク化の三つ——それらはもちろん重なりあっている場合が多い——であったが、日本聖公会関係者の貢献はそのなかで確かな位置を占めていることがわかる。

そのうち聖慈堂病院の医療救護活動と、聖アンデレ教会のA. C. ショーや同教会員らの救援活動を通して、震災孤児、とりわけその女児たちの救済施設が二つ誕生した。前者が聖ヒルダ孤女院であり、後者が麻布孤児院である<sup>18)</sup>。本稿では、前稿のはじめに示した狙いのもとに、社会福祉史において未解明な点が多いこれらの施設と震災救援活動との関わりについて検討を加えたい。

## 二. 聖ヒルダ孤女院の成立

### (一) 孤女院の開設とその生活

聖ヒルダ孤女院(St. Hilda's Orphanage)の開設時期は、判然としない。戦前期に限って、官公庁や中央慈善

協会の刊行資料からその一端を示せば、内務省地方局が作成した『感化救済事業一覧（四十三年九月調）』（1911年1月）は、聖ヒルダ孤女院から改称した「清蕙幼女学舎」の項に明治24年12月創立と記されている<sup>1)</sup>。しかし同じ内務省地方局による『感化救済事業一覧（大正六年末現在）』の清蕙幼女学舎の欄では、これとは異なり明治24年11月である<sup>2)</sup>。これらのデータは「主トシテ地方庁ノ報告ニ拠リ作成」<sup>3)</sup>とされているから、東京府の同様な一覧のうち、創立時期に関する記載のある『東京府管内感化救済事業一斑』(1913年)では、「明治二十四年濃尾震災の際」<sup>4)</sup>とするだけである。一方、中央慈善協会の手になる施設名鑑類でも事情は変わらない。その最初の発行である『日本社会事業名鑑』(1920年刊、東京府の分は1918年現在)では、明治24年11月の設立とされるが、つぎの1927(昭和2)年版(『全国社会事業名鑑』)のそれでは明治24年12月となっている<sup>5)</sup>。そして現在においても、多くはこれらのいずれかに依拠していると思われる。

しかし、このことは致し方ないともいえるだろう。前稿で述べたように、この点では日本聖公会の関係団体から刊行された同会の一般的な歴史書においてもさして変わらないからである。創立の「宣言」があったわけでも、外部に公表されたわけでもなく、『日曜叢誌』でさえその動向を報道していないということは、史料状況の問題とは別に、聖ヒルダ孤女院が大震災という非常時への対応のなかで急遽開設されたという応急的救済施設としての性格と出自を、逆に暗示しているように思われる。多くの「震災孤児院」に当てはまることとはいえ、聖ヒルダ孤女院には当初のそうした性格が比較的長く残っていたと考えることもできよう。

聖ヒルダ・ミッションの孤児院開設のきっかけをつくった聖慈堂病院派遣チームは、1891年11月3日に東京を発ち、およそ2週間後の同月16日に帰途に就いたが、リーダーのナース・グレースによる活動報告書<sup>6)</sup>に孤児たちに関する記載は一切みられない。しかしミッションの創設者であり統率者であるビカステス主教は、1892(明治25)年1月のある書簡のなかで孤児院の創設について次のように明らかにしている。ビカステス主教自身も、当時来日した父の英国エクセター教区主教(Edward H. Bickersteth)、母(Ellen Susanna)、妹メア

リー(Mary Jane)とともに国内の伝道地視察旅行中の大阪で被災しており、この震災への強い関心をもって救援活動を指揮していたのである。また孤児院開設との関係など詳細は不明であるが、ビカステス主教は濃尾震災の「直後」に自ら被災地の岐阜を視察・巡回している<sup>7)</sup>。

私たちは聖ヒルダ・ミッションの構内に孤児院(an Orphanage)を開きました。通常の下況下であったならば、このようなことは行わなかったかもしれませんが、1891年10月の大地震では約50万人もの人々が家を失いました(その中には親や保護者を失った子どもたちがかなり多くいました)。あらゆる方面から慈善的な救援の手が差し伸べられましたが、キリスト教の慈善活動は初期の頃のように、その愛する力によって際立ったものとなりました。聖ヒルダ・ミッションは医療隊を結成して派遣し、これにはナース・グレースやミス・ソートンが加わりました。二人は、負傷者の苦痛を和らげるためにできるだけのことをして帰ってきましたが、見聞きしてきた多くの少女の孤児たちに対する憐れみ(pity)には深く心を動かされました<sup>8)</sup>。

ここでは、グレースやソートンが罹災孤児の惨状だけではなく、孤児救済の活動家たち(その多くは当然日本人)が示した「憐れみ」に心を動かされたという点に注目しておきたい。「通常の下況下」での東京におけるミッション・ワークとはまったく異なって、多様な救援者が織りなす現地救援活動の一環として参加したことから聖ヒルダの孤児院は誕生したからである。このことはまた、いわば「教区のように」(“parishes”)<sup>9)</sup> 特定区域に拠点をおいて集中的な宣教と事業を推進するという地域性と定住性に基づく「独立ミッション」の枠を超えた活動であり、そこからの飛躍の結果として興った事業であった。

では、この章の冒頭に立ち返って、聖ヒルダ孤女院の開設時期(より厳密には、最初の「震災孤女」が到着した時期)はいつかという問いであるが、現在のところ、上記のビカステス主教の書簡や、メアリー・ビカステスの「私たち[メアリー自身と父母のエクセター教区主教夫妻]が日本を去った後」<sup>10)</sup>にビカステス主教が開設したという記述から、さきにみた聖慈堂病院派遣隊の東京帰還の日である1891年11月16日や、エクセター教区

主教一行が帰国のため長崎から離日した同年 11 月 15 日<sup>11)</sup> からそう遠くない日、としかいえない。当時の現地救援活動の動向を鑑みて、「そう遠くない日」を狭くとらえると、1891 年の「11 月説」のほうがより妥当といえそうではある。

聖ヒルダ・ミッションが引き取った女兒は、じつに 20 人<sup>12)</sup> にのぼる（ただし孤児引取りに関する岐阜県庁文書に記載はない）。これだけの人数を派遣チームが一度に列車で連れ帰ったとはやや考えにくいから、他の帰京する活動家に依頼し、複数回にわけて連れてきた可能性もある。実際に震地伝道隊の藤井米八郎が、要請をうけていた星野天知に代わって孤児 9 人を築地の東京教育院まで引率した例<sup>13)</sup> や、岐阜で救援と伝道に携わった好善社（東京）の創立者である長老派女性宣教師 K. ヤングマン (Kate M. Youngman) がその帰途、孤女学院から託された同じく 4 人の少女を東京に送り届けた例<sup>14)</sup> などがみられるのである。聖ヒルダ孤女院の場合、そうした一人としてさきの A. C. ショーも想定できよう。

孤児のうち、とくに女兒を救出しようとするモチーフは、よく知られているように女子教育や廢娼運動に関わる団体に共通している。たとえば、明治女学校教頭でもある『女学雑誌』主宰者・巖本善治が同誌の「社説」で、女子教育家・石井（大須賀）亮一による孤女学院設立の動機を、「醜業者の主人」が震災を奇貨として親を失った孤女を買い集めようとしているとの風聞に接したことにあると述べ<sup>15)</sup>、この問題に対する社会の関心を喚起した。聖ヒルダ・ミッションも同様に、「日本の少女にとって、厳しい貧困は生計をたてる唯一の方法として、墮落した職業に就くきっかけとなることが多い<sup>16)</sup>」ので、その「罪深さ」、またそうするように追い込まれる事態から少女たちを救助しなければならないという思いから始まったという。

この 20 人の少女を収容する寮舎には、空いていた聖慈堂病院の建物が充てられた<sup>17)</sup>。というのは、1891 年 1 月に開業したばかりの同病院の敷地（借地）に法的な問題が起り、震災当時病院は閉鎖されていたのである<sup>18)</sup>。麻布区永坂町一番地の聖ヒルダ・ミッションの本拠地は隣接する伯爵島津忠亮邸からの借地であった<sup>19)</sup>。

しかし「何もないよりはまし<sup>20)</sup>」といわれていたほどの院舎は、当然生活の場としてふさわしくなかった。と

くに日本の一般家庭生活における礼儀作法の習得を重視するこの孤児院の方針にとって、西洋式建物はあまりに不都合だった。ピカステス主教夫人 (Marion Bickersteth) は部屋がわびしくてバラックのようだというだけでなく、まったく外国人仕様の西洋建築であることを嘆き、日本人教育の大きな部分を占めるとともに、少女たちの将来の生活にとってきわめて重要な「礼儀」が教えられないと憂慮していた<sup>21)</sup>。当時の孤女院担当者と思われる聖ヒルダ・ミッション団員ミス・ブルック (L. Bullock) や、実際の養育責任者 (matron) である孤女院「主任」の「ミセス・ヨシダ」、すなわち吉田じゆん<sup>22)</sup> らが共有していたこの悩みは、後述のように 1895 (明治 28) 年まで続くことになる。

子どもたちの普段の生活と教育については、同ミッションの「一婦人」の貴重な報告<sup>23)</sup> によってかなり詳細に窺うことができる。それをもとに、まずかれらの日課をほぼ五つの時間帯に区分して示しておこう (1894 年当時)。

第一のステージは、朝食と午前 6 時 15 分からの「朝の祈り」(Matins) の時間で、朝食の後、同じ構内にある聖ヒルダ館のチャペルに出かける。集団での行き帰りを子どもたちは楽しみにしており、雪合戦のできる雪の日などはとくにそうだったという。第二は「朝の祈り」から戻って、午前 8 時近くまでの時間で、掃除・片づけと登校の準備などに充てられる。年長児たちは各自の仕事に分れて、あるものは自室の掃除をしたあと年少児の分も含めて衣服・寝具を整頓し、別の年長児は調理室で食器洗いや、主任のもとで昼食の準備を行なう。その他の年長児は、施設内の廊下やバルコニーを掃除し、さらに体力のあるものは学校の教室の掃除や整理を担当する。そしてバス・ルームで年少児の顔と手を洗ってやり、全員的身だしなみが整ったことを確認して登校となる。

第三の学校生活は、午前 8 時から始まり、途中 10 時 30 分から 15 分間の休憩をはさんで午後 12 時 15 分で終る。第四に、学校から戻った後の昼食とそれ以降の「ホーム」の生活である。午後 1 時過ぎに食事を終え、片づけと 1 時間の休憩のあと、午後 2 時に全員が集合して自分の衣服が縫えるよう主任から針仕事を習うが、ときには香蘭女学校で音楽も担当していたソーントンによる唱歌指導<sup>24)</sup> を受けることもあるという。以下、第五の夕食と

それ以降については触れられていない。

またこの文書は単なる現状報告を超えて、子どもたちに注がれた視線の温かさとともに、執筆者の外に向けられた意図が鮮明に現れているという点でも興味深い。その意図は、子どもたちの生活が劣悪な居住条件にもかかわらず、いかに敬虔でおだやかで、かつ活気に満ちたものであるかを外部（たとえば英本国の支援者）に伝えることであろう。それを象徴的に表現しているのが、朝のチャペルの席で「バラ色を帯び、健康的に輝いている」<sup>25)</sup>少女たちの表情を書き取っている印象的な場面で、聖ヒルダ・ミッションの孤児院の存在意義を何よりも物語るレポートとなっている。

つぎに子どもたちが通学する「学校」は、1890（明治23）年9月、やはり同じ構内の香蘭女学校に付設された尋常小学科（尋常小学校）<sup>26)</sup>である。実際に視察もしたメアリー・ピカステスによれば、これは1888（明治21）年4月に開校した香蘭女学校を日本の一般的な学校制度と一致させるよう<sup>27)</sup>、従来の本科・予科・小学科<sup>28)</sup>に尋常小学科を新たに配して編成されたものであった（従来の「小学科」は高等小学校にあたる）。そしてこの新設が、翌1891年8月に発表された香蘭女学校の「方針転換」の基盤となったと考えることができる。当時の社会的現実即ちこの転換とは、「従来貴族間に拡張する」のが目的であった同校を、翌9月の新学期から「目的を一変し広く生徒を募集し平民主義教育を採らん」<sup>29)</sup>とするもので、そのために授業料を減額し、邦語の授業も増やし、広く門戸を開くことにしたのである。志願者増加策という側面もあっただろうが、こうした震災直前の「貴族教育主義」から「平民教育主義」への旋回が孤児院教育の場を期せずして準備したことになる。

上記の孤女院生活の報告から、実際には子どもたちは無償の慈善学校（Charity School）と称している尋常小学科内の別クラスに通学したと考えられるが、そこで読み書き、簡単な算数、地理、歴史、道徳、学校唱歌の「一般教養」が授けられた（1894年当時）<sup>30)</sup>。2年余のずれがあるが、1891年末当時における一般の尋常小学科の教科<sup>31)</sup>と比較すると、最大の相違は後者には「英語」が課せられていることである。いずれにしろ、こうした同一構内の香蘭女学校との密接な関係によって、同じ聖ヒルダ・ミッションの一事業たる聖ヒルダ孤女院が、ときに

香蘭女学校の付属施設と誤解されることにもなった<sup>32)</sup>。

## （二）寮舎の新設——「ジョン・ビショップ孤児院」

聖ヒルダ孤女院の最大の課題であった寮舎問題は、欧米はもとよりわが国でも著名な女性旅行家で、『日本奥地紀行』（Unbeaten Tracks in Japan, 1880）の著者であるイザベラ・バード（Isabella L. Bird）、当時のジョン・ビショップ夫人（Mrs. John F. Bishop）の寄付によって思いがけなく解決をみることになった。

その背景には、ピカステス主教夫妻とバードとの間に親密な友人関係があった。1898（明治31）年のバード自身の手紙によれば、日本着任前のピカステス主教との出会いから7年後の1895（明治28）年6月、来日していたバードが招待に応じてピカステス主教の主教館——彼女は「わが家のような」（look of home）<sup>33)</sup>と記している——に滞在したが、そこで多額の寮舎建設費が提供された。旅行家・紀行作家の彼女は英国国教会による宣教事業の有力な擁護者でもあったのである。

聖ヒルダ孤女院にとってこの記念すべき日のことを、贈られた側のピカステス主教夫人は大きな喜びをもって語っている（マーレー宛書簡）。その日、つまり夫・ピカステス主教の誕生日は6月28日である<sup>34)</sup>。

私は1895年の6月のあの日を決して忘れないでしょう。ビショップ夫人はその日が私の夫の誕生日であることに気がつき、夫の書斎に小切手の入っている封筒を持ってきたのです。その金額は聖ヒルダ・ミッションにとって緊急に必要であり、私たちにとってもたいへん重大な孤児院の建設に要するちょうどその額でした。それを贈ってくれた彼女の喜びも、少なくともそれを受け取った私たちの喜びと同じように大きいものだったのです<sup>35)</sup>。

またピカステス主教夫人は、このことがあった同じ1895年にはより直接的に、バードが「聖ヒルダ・ミッションの事業に大いに興味を示し、私たちから「新しい孤児院〔の寮舎〕が必要であると聞いて」<sup>36)</sup>その資金を提供してくれたと述べている。

この建物は結婚からわずか5年後の1886（明治19）年に病没したバードの夫・ビショップ博士（Dr. John F. Bishop）の記念でもあり、「ジョン・ビショップ孤児院」

(John Bishop Orphanage) と命名された<sup>37)</sup>。

こうした宣教団体に対するバードの資金提供はこれだけでなく数多い。そのなかでもとくに「私は三つ病院を開設することができました。そのベッド数は160床になります」とバードは1896年3月の書簡<sup>38)</sup>に記している。その一つは、ソウルのコーフ主教の下にあるドーラ・バード病院に、もう一つは中国四川省保寧府のキャッスルズ主教の下にあるヘンリエッタ・バード病院であり、そして残りの一つが「東京のビカステス主教の下にある、震災のために孤児となった25人ための孤児院」だったのである。孤児院を病院と同列に数えた理由はわからない。

聖ヒルダ孤児院にはなかった開院式が同じ1895年の9月28日（「聖ミカエルのイブの日」）、ビカステス主教の司式のもとで挙行された<sup>39)</sup>。主役であるバードもこの式典に参加し、また今も見ることができると新設の建物と、そこに移った子どもたちの写真をこのとき撮ったようである<sup>40)</sup>。その建物は、もちろん待ち望まれた「日本家屋」（ビカステス主教夫人、同上書簡）であった。

聖ヒルダ孤女院はいわば仮開業であって、これが正式な開院であるという意識がミッション内に存在したのではないかと推測できるが、そうであるならば、聖ヒルダ孤女院の開設時期が明瞭でない理由の一つがそこにあると考えることもできる。すでに述べたように、これ以降は、聖ヒルダ・ミッションの「事業にはすべて聖ヒルダなる名称を付する」<sup>41)</sup> というビカステス主教自身の言葉に反して、John Bishop Orphanage と称されることになった。厳密には、「ジョン・ピシヨブ館」は聖ヒルダ孤女院が初めてもった自らの寮舎——ビカステス主教夫人によれば、「ゆったりとして、小ざれいで、快適なホーム」（強調点、引用者）<sup>42)</sup>——であり、その新設を契機に孤児院自体も英語名では「ジョン・ピシヨブ孤児院」と改称されたといわねばならない。

### 三. 麻布孤児院の設立

ビカステス主教の妹メアリー・ビカステスは、濃尾震災という日本人にとっての大災厄のなかで示された「外国人の同情心の証」として、兄の主教が聖ヒルダ・ミッションに震災孤児のための孤児院の開設しただけでな

く、「東京の聖アンデレ教会の会衆たちによる同じような孤児院を設立」<sup>1)</sup> したと指摘している。それが社会福祉史のなかでほとんど埋もれていた麻布孤児院<sup>2)</sup> である。ミッションが経営する聖ヒルダ孤女院とはやや異なり、麻布孤児院の創設にはビカステス主教の指導や奨励、承認があったことを意味するのであろう。

麻布孤児院の設立を実際に推進した聖アンデレ教会のおもな関係者は、さきの義捐金品の募集と送付に活躍した同教会会衆のC. カルクス (Caroline Kirkes)、宮内省式部次長・三宮義胤夫人の八重野 (英国人)、A. C. ショー夫人のA. メアリー (Mary A. Show) と、同教会牧師A. C. ショーである。

三夫人のなかでも最も中心的な役割を果たした三宮八重野は、罹災者救援物資募集の「世話人」となり<sup>3)</sup>、「貴婦人」たちとの幅広い交流を活かして、冒頭でみたように活発な義捐の勧誘活動を展開した<sup>4)</sup>。C. カルクスは、女子教育奨励会によって1888年に開学された東京女学館の最初の館長兼教師として明治女子教育界で知られるが、聖アンデレ教会の活動では三宮夫人と同様、その豊富な人的ネットワークを通して「上流社会」における伝道に大きく貢献していた。震災救援金品の募集や孤児院設立のための寄付金募集の際にもその力が十分に発揮されたのである。「C. K.」という筆者でC. カルクスが書いたエッセイの冒頭で、そのことをこう語っている。

此頃まで私共は、去年 [1891年] の大地震にて独り者となりました親なし子について皆な心を配つて居りました、そしてお金や衣類など沢山親切な贈り物がありまして、麻布の小さな孤児院に頂戴致しました<sup>5)</sup>

A. C. ショーによれば、この義捐金によって麻布孤児院の土地と家屋の購入費用400ポンド近くが賄え、さらに会衆たちが年に100ポンドを超える額の支援を約束することによって実現したのである<sup>6)</sup>。麻布孤児院創設の発起人は、これらの三夫人と他数名の有志とされているが<sup>7)</sup>、彼自身も「聖アンデレ [教会の会衆] と協力して孤児院を設立した」<sup>8)</sup> と述べているように、同教会の指導的立場にあったA. C. ショーもまたそのなかに加えなければならない。その意味で、この孤児院を「聖アンデレ孤児院」と呼ぶことができるだろう。事実、英語名でそう命名されていた可能性もある<sup>9)</sup>。

こうして麻布孤児院は、聖ヒルダ・ミッションから直線距離で7,800メートルの同区麻布中之町四番地に置かれ、「奸商の毒手を免がれしむるに在るを以て」女兒に限定し、「尾濃地方より貰ひ受けたる」9名を収容した<sup>10</sup>。その孤児院名（日本語名）は、初期には所在地の町名をとった「中の町孤女院」<sup>11</sup>であり、後に麻布孤児院に変わったと考えられるが、詳びらかでない。

しかし、ここでもその開設の時期は特定できていないが、上記の女兒収容を報じる1892（明治25）年1月1日発行の『日曜叢誌』（26号）に拠って、1891年12月頃と推定しておきたい。また、同じ記事は「尚ほ多く余裕あるを以て間もなく人を同地方に派遣して数多の女兒を募集」し、さらに施設を整備のうへ「男子部」の設置も計画中と伝えているが、やや後の「基督教徒の慈善事業」一覧（1899年12月調査）をみると、収容人数は14人まで増えているが、男子部設置は実現しておらず、すべて女兒であった。発足当初の職員は不明だが、この調査時には「主任者」を駒野卓爾としている<sup>12</sup>。

創設後の孤児院運営は、C.カルクスが1893（明治26）年4月に急逝したこともあって、三宮八重野によって担われたようである。そのことは、彼女の友人であるベルギー公使ダヌタン夫人（Eleanora M. d'Anethan）が、麻布孤児院は「三宮夫人によって創立され、夫人の特別な庇護の下にある施設」<sup>13</sup>と日記に書き、また「三宮夫人が世話をしている震災孤児のための孤児院」<sup>14</sup>などと記されていることから窺うことができる。同じ日記の1900（明治33）年12月1日の条には、八重野が孤児院の資金獲得のためのバザーを開き、100ポンド以上の資金をえたことが記されているが<sup>15</sup>、「上流社会」の幅広い人脈をここでも活かして、こうしたバザーやパーティーをたびたび開き、孤児院の運営を支えていたのである。しかし、名称、経営主体、所在地、組織などを変えつつ第二次世界大戦時まで継続された聖ヒルダ孤児院とは違って、麻布孤児院は早くも1902（明治35）年に廃された<sup>16</sup>。その理由は不明である。

あらためてピカステス主教が開設を主導したこれらの孤児院の位置を、さきの「基督教徒の慈善事業」調査（1899年）からみておくと、当時全国の「救児事業」が14施設<sup>17</sup>、そのうち濃尾震災による孤児救済を契機に開設されたと確認できるものは、以下のとおり、じつに半数近くの6

施設であった。東京の孤女学院（調査時点の名称、滝乃川学園）、北海道虻田郡の北海孤児院（ただし同院は震災直前に設立計画が進み、震災孤児の収容をもって開院）、名古屋市の養老院（同、幼老院）、岐阜県大垣町の愛岐震災自助会（同、名古屋市の名古屋孤児自助会）とともに、聖ヒルダ孤女院（同、清蕙幼女学舎）と麻布孤児院はそのなかの二つである。

## 結びにかえて——新たな慈善事業の試み

キリスト者による濃尾震災救援活動の特徴の一つは、震災孤児の救済とその救済の継続としての孤児院事業の展開にあり、以上みてきたように聖ヒルダ・ミッションもその一翼を担ったわけだが、このミッションにさらに新たな事業開拓の試みがあったことを付け加えておきたい。

1893（明治26）年9月発行の『日曜叢誌』において今井寿道は、「盲人＝<sup>ママ</sup>訓盲事業＝福音の使者たらしめよ」と題する先駆的なキリスト教訓盲事業論を展開した。そのなかで「先づ全国に訓盲所を設立せよ」<sup>18</sup>、「吾徒は全国のキリスト教徒が不幸なる盲者の為に計る所あらんことを」<sup>19</sup>と力強く訴えたのであるが、同誌翌月号への投稿でこれに応答したのは「意外にも」聖ヒルダ・ミッションの日本人団員である酒井まさゑ（正栄とも表記される）であった。以前から盲人に「同情を表する者の一人」であったという酒井は、同じくミッションの日本人団員・磯辺ソヨと思われる「同感の一姉妹」とともに、この年の7月、短期間ながら将来の訓盲事業の準備と盲啞児の生活実態の把握を目的に、盲啞学校に泊り込んで生徒と寝食を共にしつつ、研鑽を積んでいたのである。その盲啞学校とは楽善会訓盲院の後身、官立東京盲啞学校（築地三丁目）のことであろうが、そこでの体験をとおして彼女が最も「遺憾」としたのは、多くの盲啞児のなかに「一人の女子すら入舎しておらぬ事」<sup>20</sup>であった。当時緒に就いたばかりの訓盲事業であるが、そこからも疎外されている女兒のための訓盲事業を新たに開拓しようとする抱負を、酒井は以下のように披瀝している。

「元来妾等の第一の願は不明の同胞にして自由に聖書を読ませ、彼等をして通常の人々の如く福音の幸福を受けさせんと云ふ事にてありし、故に妾等は点

字を習ひ覚へて、他日群盲の事業を創めん日の準備を成さん<sup>4)</sup>

「被等をして主の救拯を受るの喜びに至らしめんことは聖公会が最も勉むべき事と存居候、……妾の属する聖ヒルダ伝道会にても盲人伝道の為に祈祷しおることにて、若し幾分にてても此の事業を創め或は之を補益するをゑは、固より該会及び妾の喜び感謝する所に候<sup>5)</sup>

酒井らが学ぼうとした点字は、これより3年前の1890年に東京盲啞学校で採用が決定された同校教師石川倉次の考案になる「日本点字」のはずであるが、その原型である「ブライユ点字」についても酒井はここで触れており、訓盲事業や点字に対する深い理解が窺える。ミッションを通してそうした欧米の知識も得ていたのだろう。「ブライユ点字」はルイ・ブライユ (Louis Braille) の母国フランスではなく、トーマス・アーミテージ (Thomas R. Armitage) らの努力によって英国で最も普及・発展していた<sup>6)</sup>。

被災地の岐阜聖公会における訓盲事業に対する組織的な取組みの結果、岐阜聖公会訓盲院が翌1894 (明治27)年3月に岐阜市神田町に創立されるが<sup>7)</sup>、前年に失明した院長の森巻耳 (1889年にビカステス主教から信徒按手式受領<sup>8)</sup>は盲教育の調査研究や点字・マッサージの習得のため、この東京盲啞学校に半年間派遣されていた。森は同校出張から岐阜に戻る直前には『日曜叢誌』の発行所・聖教社 (麻布区飯倉二丁目) を訪問しており<sup>9)</sup>、聖ヒルダ・ミッションでも当然この訓盲院に注目し、刺激を受けていたと思われる。その岐阜聖公会訓盲院も震災直後に、宣教師 (当時 CMS) A. F. チャペル (Arthur F. Chappell) や森らによる罹災盲人救済活動から生まれた鍼按練習所が発展したものであった<sup>10)</sup>。酒井らの訓盲事業の構想に鍼按練習所の開設が何らかの影響を与えたと考えられるなら、この取組みも震災救援と関わる聖ヒルダ・ミッションの慈善事業の試みとして数えることができる。

女子訓盲院という類のないプランは結局実現しなかったが、しかし酒井らはその活動を継続していた。彼女が『日曜叢誌』に寄稿した翌年の1894年9月頃、SPGの宣教地沼津で酒井、磯部、それにソーントンも加わって婦人伝道に従事し、その「かたはら盲人の凸字の綴りを

教へ<sup>11)</sup>」ていたのである。こうした女子訓盲の地域活動も含めて、聖ヒルダ・ミッションの「伝道的」慈善事業もまたキリスト教社会事業が生成するための土壌を耕したといえるであろう。

## (注)

### 一. 日本聖公会関係者の震災救援活動

- 1) 聖ヒルダ・ミッションやピカステス主教については、本稿の(1)を参照されたい。中西良雄「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業(1)——聖慈堂病院と震災救援活動」『人間発達学研究』2号、2011年3月。
- 2) 『日曜叢誌』25号、1891年12月1日、41頁。なお、以下、引用にあたって原文に付された圏点や下線、ふりがななどは原則として省略し、字体等も一部の例外を除いて通行のものに代えた。
- 3) 『公会月報』4号、1891年11月15日、p41-42頁。また、『女学雑誌』290号 (1891年11月7日) もこの音楽会について「濃尾震災救恤慈善会」と題して伝えている (242頁)。
- 4) C. F. Pascoe, *Two hundred years of the S. P. G. : an historical account of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 1701-1900*, II, London: the Society's Office, 1901, p. 723.
- 5) *The Japan Weekly Mail*, Nov. 21, 1891, pp. 615-617. A. C. ショーの報告は投稿欄に「地震のまち」(11月12日付)と「破壊されたまち」(11月14日付)の2編が掲載されている。
- 6) Pascoe, *Two hundred years of the S. P. G., 1701-1900*, II, p. 723.
- 7) 前掲、中西良雄「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業(1)——聖慈堂病院と震災救援活動」。
- 8) 同上、19頁。
- 9) たとえば以下の論考がある。西沢道夫「三島開墾地での孤児救済事業(一)——本郷定次郎の生涯」『那須野ヶ原開拓史研究』10号、1981年8月。同「近代社会事業と那須野育児暁星園」『西那須野町郷土資料館紀要』8号、1991年12月。岡部一興「明治期におけるキリスト教社会事業——本郷定次郎の育児暁星園を中心にして」『相洋学窓 相洋中高等学校紀要』6号、1988年。
- 10) 佐藤一誠『育児暁星園』警醒社書店、1898年、52頁。
- 11) 中西良雄「震地伝道隊と濃尾震災救援活動」『愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編)』第56号、2008年4月、81-91頁、参照。
- 12) 『護教』107号、1893年7月22日、5頁。
- 13) 藤井米八郎「震地伝道隊報告 震災地特別通信 第四報」『女学雑誌』第295号付録、1891年12月5日。
- 14) 『福音新報』35号、1891年11月13日、14頁。
- 15) 『福音新報』第34号、1891年11月6日、5頁および同紙35号、11月13日、14頁。
- 16) 「基督教徒震災救助義捐金第五期報告」『護教』23号、1891年12月12日、7頁。
- 17) 東京教育院による震災孤児の受入れについては、前掲、中西良雄「震地伝道隊と濃尾震災救援活動」90頁、参照。
- 18) 本稿では、社会福祉史における慣用に従って「聖ヒルダ孤女



院」と表記しているが、聖ヒルダ・ミッションの孤児院の日本語名「聖ヒルダ孤女院」が使用されるようになった時期やその経緯などについては詳らかでない。なお、元田作之進『日本聖公会史 全』（普公社、1910年）による永坂町の「孤児院」の創立時期は、後述のように（理由のある）誤りであるが、その「孤児院」が明治31年に「孤女院」となったという記述（246頁）も無視することはできない。また、「麻布孤児院」の名称等に関しても三章でふれているが、その詳細については上の聖ヒルダ孤女院と同様である。これらについては今後の課題である。

## 二. 聖ヒルダ孤女院の成立

### (一) 孤女院の開設とその生活

- 1) 『感化救済事業一覧（四十三年九月調）』内務省地方局、1911年、3頁、社会福祉調査研究会編『戦前期社会事業史料集成 第4巻』日本図書センター、1985年、所収。
- 2) 『感化救済事業一覧（大正六年末現在）』内務省地方局、（発行年不詳）7頁。
- 3) 前掲、『感化救済事業一覧（四十三年九月調）』24頁。
- 4) 東京府編『東京府管内感化救済事業一斑』東京府、1913年、24頁。
- 5) 中央慈善協会編『日本社会事業名鑑』同会、1920年、「第貳輯 関東方面」88頁、社会福祉調査研究会編『戦前期社会事業史料集成 第9巻』日本図書センター、1985年、所収、および中央慈善協会編『全国社会事業名鑑 昭和二年版』同会、1927年、541頁、社会福祉調査研究会編『戦前期社会事業史料集成 第10巻』日本図書センター、1985年、所収。
- 6) 前掲、中西良雄「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業(1)」17頁以下、参照。
- 7) 「ピカステス主教按手記録」、岐阜聖パウロ教会小史編集委員会編『岐阜聖パウロ教会小史（前編）』同教会、1986年、35頁。
- 8) Frances Awdry, *Daylight for Japan: the story of mission work in the land of the rising sun*, London: Bemrose & Sons, 1904, p. 176.
- 9) Mrs. Edward Bickersteth, *Japan*, London: A. R. Mowbray, 1908, p. 118.
- 10) M. Bickersteth, *Japan As We Saw It*, London: Sampson Low, Marston and Co., 1893, p. 228. なお、本書の著者の名を前編【注1】ではメイ（May）と表記したが、これは本来のメアリー（Mary）の縮小形であるので、本稿ではメアリーと訂正した。ただし原著書の著者標記は、本注記の通り略記（M.）となっている。
- 11) *Ibid.*, p. 311.
- 12) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 176.
- 13) 「震地特別通信 第三報」『女学雑誌』293号付録、1891年11月28日。
- 14) 『女学雑誌』326号、1892年9月3日、25頁、および中西良雄「好善社と濃尾震災救援活動」『愛知県立大学文学部論集（社会福祉学科編）』55号、2007年3月、81頁。
- 15) 社説「震災一周年 孤女学院を憶ふの感」『女学雑誌』330号乙の巻、1892年10月29日、1頁。
- 16) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 176.
- 17) *Ibid.*
- 18) M. Bickersteth, *Japan As We Saw It*, p. 23. ただし同院付属の施療所（Holly Charity Dispensary）は開業しており、入院施設ということに問題があったと思われる。
- 19) 『香蘭女学校100年のあゆみ』（学校法人香蘭女学校、1988年）によれば、香蘭女学校校舎の敷地に関して、1,644坪を30年契約で借地をしている（122頁）ので、ミッション全体の敷地も同様の期間あったと思われる。なお、ときに異なった爵号が冠されている島津忠亮は、借地契約時には子爵であったが、1891年4月に伯爵に陞爵した。
- 20) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 184.
- 21) *Ibid.*
- 22) *Ibid.* ミス・ブルックは1891年に聖ヒルダ・ミッションのメンバーとなっている。また、原文のMrs. Yoshidaが「主任」の吉田じゆん（または「しゆん」）とした点については、元田作之進『日本聖公会史 全』普公社、1910年、246頁、および原胤昭「基督教徒の慈善事業一覧表 明治卅二年十二月の現在調査」、留岡幸助編『監獄改良』警醒社書店、1900年、（付録第三）、参照。
- 23) 以下、聖ヒルダ孤女院における院児の生活については、とくに注記したものを除いて、前掲、Awdry, *Daylight for Japan*, pp. 177-181. による。
- 24) ソーントンは唱歌を「非常に根気よく指導してくださった」とされている（同上、181頁）。また、香蘭女学校「設置願」に付された履歴書（1887年10月21日付）では、ソーントンの担当教科には英語・裁縫とともに音楽が挙げられている（東京都公文書館編『都史紀要九 東京の女子教育』東京都情報連絡室都政情報センター管理部センター管理室、1961年11月、140頁）。
- 25) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 178.
- 26) 広告「香蘭女学校生徒募集」『女学雑誌』224号、1890年8月、巻末広告欄。
- 27) M. Bickersteth, *Japan As We Saw It*, p. 88.
- 28) 『日曜叢誌』9号、1890年8月1日、40頁。
- 29) 『日曜叢誌』22号、1894年9月1日、37頁。
- 30) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 181.
- 31) M. Bickersteth, *Japan As We Saw It*, p. 88.
- 32) たとえば、以下に述べるように、『日曜叢誌』できえ聖ヒルダ孤女院が「改称」（英語名）したジョン・ビショップ孤児院を「香蘭女学校付属孤児院」としている（71号、1895年10月1日、32頁）。

### (二) 寮舎の新設——「ジョン・ビショップ孤児院」

- 33) 1898年10月6日付、ピカステス宛ビショップ夫人書簡。Samuel Bickersteth, *Life and letters of Edward Bickersteth: bishop of south Tokyo*, London: Sampson Low, Marston and Co., 1899, p. 391. イザベラ・バード、金坂清則訳『イザベラ・バード極東の旅2』（平凡社、2005年）にこの書簡の邦訳が収載されている（167頁以降）。宛先の「ピカステス」は、この書の著者Samuel Bickerstethとされる（金坂清則、同書335頁）。
- 34) *Ibid.*, p. 1.
- 35) マーレー宛ピカステス主教夫人書簡。Anna M. Stoddart, *The life of Isabella Bird (Mrs. Bishop)*, London: Jhon Murray, 1906, p. 304. 高畑美代子「イザベラ・バード（ビショップ夫人）の日本旅行記以後の日本との絆——日程とジョン・ビショップ

孤児院・その他の寄附を中心に『英学史研究』42号, 2009年, 44頁, および金坂清則「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎的検討」『旅の文化研究所研究報告』3号, 1995年12月, 43-48頁, 参照。書簡の訳出にあたっては高畑美代子稿を参照した。二つの病院名は金坂清則稿(46頁)による。

36) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 185.

37) 『日曜叢誌』71号, 1895年10月1日, 32頁, および同上。

38) マーレー宛ビショップ夫人書簡。Stoddart, *The life of Isabella Bird (Mrs. Bishop)*, p. 325. O. チェクランド, 川勝貴美訳『イザベラ・バード 旅の生涯』(日本経済評論社, 1995年)は, この書簡が1896年3月15日付であることを明らかにしている(291頁)。書簡の訳出にあたっては同書(242-243頁)を参照した。

39) Stoddart, *The life of Isabella Bird (Mrs. Bishop)*, p. 304. および『日曜叢誌』71号, 1895年10月1日, 32頁。

40) ジョン・ビショップ孤児院の建物の写真は金坂清則編訳『イザベラ・バード極東の旅1』(平凡社, 2005年)に詳細な訳注ともに収載されている([写真]167頁, [訳注]232頁)。同じく子どもたちの集合写真と訳注は, イザベラ・バード, 金坂清則編訳『イザベラ・バード極東の旅2』平凡社, 2005年, [訳注]336-337頁, [写真]167-168頁。その写真には18人の子どもと職員と思われる一人が写っている。ジョン・ビショップ孤児院については, 前掲, 高畑美代子「イザベラ・バード(ビショップ夫人)の日本旅行記以後の日本との絆——日程とジョン・ビショップ孤児院・その他の寄附を中心に」も参照。

41) 前掲, 中西良雄「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業(1)——聖慈堂病院と震災救援活動」17頁。

42) Awdry, *Daylight for Japan*, p. 183.

### 三. 麻布孤児院の設立

1) M. Bickersteth, *Japan As We Saw It*, p. 229.

2) 麻布孤児院が社会福祉史研究で取り上げられたことはないが, 例外的に戦前刊行の社会事業研究所『日本社会事業大年表』(刀江書院, 1936年)に一項目として採られている。ただし典拠は示されず1891年10月の設立とされている。

3) 『女学雑誌』292号, 1891年11月21日, 24頁。

4) 同上, および同誌25号, 1891年12月1日, 41頁, 参照。また, 同誌295号(1891年12月12日)にも, 榎本子爵夫人, 公爵三条家などに勧誘して衣類を得ていることが報じられている。

5) C. K. 「盲目なる子供フロラの話」『日曜叢誌』36号, 1892年11月1日, 478頁。

6) Pascoe, *Two hundred years of the S. P. G., 1701-1900*, II, p. 723

7) 『日曜叢誌』26号, 1892年1月1日, 43-44頁。

8) Pascoe, *Two hundred years of the S. P. G., 1701-1900*, II, p. 723.

9) 以下の文献に St. Andrew's Orphanage の名称がみられるが, 詳細は明らかでない。Alfreda Arnold, comp. *The Light of Japan.: Church Work in the Dioceses of South Tokyo, Osaka and Kiushiu under the Church of England*, Hartford: Church Missions Publishing Co., 1906, p. 68.

10) 『日曜叢誌』26号, 1892年1月1日, 43-44頁。

11) 『日曜叢誌』60号, 1894年11月1日, 31頁。

12) 原胤昭「基督教徒の慈善事業一覧表 明治廿二年十二月の現在調査」留岡幸助編『監獄改良』警醒社書店, 1900年10月, (付録第三)。ただし, この調査で創立年月は明治24年10月となっている。

13) エリアノーラ・メアリー・ダスタン, 長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』中央公論社, 1992年, 49頁。

14) 同上, 232頁。

15) 同上。

16) 元田作之進『日本聖公会史 全』普公社, 1910年10月, 246頁。

17) 前掲, 原胤昭「基督教徒の慈善事業一覧表 明治廿二年十二月の現在調査」。

### 結びにかえて——新たな慈善事業の試み

1) 『日曜叢誌』46号, 1893年9月1日, 365頁。

2) 同上, 366頁。

3) 酒井まさゑ「訓盲事業に就て」『日曜叢誌』47号, 1893年10月1日, 420頁。なお, 酒井まさゑ, 磯辺ソヨとも同ミッションの正式メンバーとなったのは1892年である。

4) 同上。

5) 同上, 422頁。なお, 酒井のこの寄稿を今井寿道(ここでは「記者」)は喜び, 寄書の末尾につきようなコメントを付記している。「女性已に訓盲事業の為に盲啞学校に入りて盲啞と寝食を共にするをさへ厭はざりし, 吾徒は未だ男子にして此事ありしを聞かざるなり」(同頁)。

6) 東京盲啞学校における「ブライユ点字」の導入や石川倉次による「日本点字」, 「ブライユ点字」の欧米での普及・発展の状況については, 大河原欽吾『点字発達史』(培風館, 1937年3月)150頁以降を参照。

7) 岐阜聖公会訓盲院については, 『岐阜盲学校百年史』岐阜県立岐阜盲学校百周年記念事業実行委員会, 1994年, 参照。

8) 前掲, 岐阜聖パウロ教会小史編集委員会編『岐阜聖パウロ教会小史(前編)』26頁。

9) 『日曜叢誌』64号, 1895年3月1日, 33頁。

10) 前掲, 『岐阜盲学校百年史』12-13頁参照。

11) 『日曜叢誌』59号, 1894年10月1日, 381-382頁。